連載　いつきのつれづれ日記 ⑮

自分と出会いなおす場

５月×日

朝がきた。目覚めの瞬間、「誰も来なかったらどうしよう」、ふと不安が頭をよぎる。

買い出しに向かう途中、次々とメールが入ってくる。「先生、ゴメン、ちょっと遅れるし」「集合場所どこやったっけ？」「今日のメニューは？」。てことは、みんな来るってことやな。ホッ。

会がはじまる。ぎょうざの皮をこねながら、あたりを見まわすと、メチャ来てる！よかったぁ…。

＊　＊　＊

わたしは教員として、たくさんの部落や在日の生徒の「変わり目」に立ちあうことができました。子どもたちの「変わり目」には、必ず「出会い」と、出会いをつくりだす「場」がありました。それは、例えば校内のクラブ活動、地域の集まり、あるいは全国規模のさまざまな集まりです。これらの活動は、「出会い」の大切さをよく知るたくさんの人々がつくりあげてきたものです。気がつくと、わたしもそのうちの一人になっていました。

一方、わたしは子どもたちの出会いの場にかかわりながら、常に自分が置いてきぼりにされている気がしていました。そこで感じる孤独感は、次第にわたしから、自分自身の存在への肯定感を奪っていきました。しかし、そんなわたしも、「玖伊屋」や「セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク」に集う仲間たちとの出会いで、自分自身を肯定する力をとりもどすことができました。

ところで、数年前から、若いトランスジェンダー当事者から相談がくるようになりました。どの相談からも、ひとりで思い悩み、誰に聞けばいいのかわからず、一縷の望みを持ってわたしにアクセスしてきたことが伝わってきました。やがて、わたしは、そうした子どもたちがつながる「トランスジェンダー生徒交流会（以下、交流会）」をつくりたいと考えはじめました。

交流会をしたいと思ったもうひとつの理由は、若年層トランスジェンダーにとってのロールモデルの少なさでした。テレビに当事者が登場することは、かつてに比べずいぶん増えましたが、「NHKかバラエティー番組」という構図は、今もそんなに変わってはいません。また、情報のかたよりも心配です。あたかも情報はネット上にあふれているかのようですが、実際に会い、話すことの大切さは言うまでもありません。

2006年７月、はじめての交流会を開催しました。次の文章は、その時のある参加者の感想です。

めちゃくちゃ緊張した分、あまりにも自由であっけにとられた。皆、料理夢中やし、いつきさんはビール飲んでるし（笑）。初めて多くの同じ人に出会えて、しかも話できて、あん時はホンマに新たな一歩を踏み出した気がした。話聞いて理解してくれた時に、嬉しくて必死で涙堪えてたりしたよ。恥ずかしい話ですが（笑）。

５人の参加者からはじめた交流会でしたが、現在は常に10数人が集まるようになりました。参加者の多くは、学校の教員が連れてきます。また、交流会の運営も教員が主体になっておこなっています。教員が交流会にかかわるということは、とりもなおさず、トランスジェンダー、さらにはLGBTIのことを学校の教育課題としてとらえていることに他なりません。

先日の交流会では、みんなで昼食をつくり、食べ、自己紹介をした後、子どもたち同士がいつの間にか思い思いにグループをつくり、話しあいをしていました。よく見ると、それぞれの輪の中心に、今や先輩となった第１回からの参加者がいました。交流会の中で、子どもたちは、仲間と出会い、先輩と出会い、自分自身と出会いなおしていきます。硬い表情をしていた初参加の生徒も、たった５時間の交流会なのに、終わる頃には優しい笑顔を見せてくれるようになっていました。

「こいつらと出会えてしあわせやなぁ」。子どもたちの姿を、○ビスを片手に見ながら、そう思う一日でした。　（土肥いつき　高校教員）

イラスト／畠山恭子